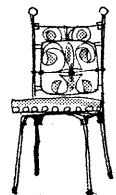


## 伝統的なあそび——行事など

# 幼稚園生活の中の問題点

幸 田 素 子



「幼稚園における行事など伝統的なあそびの持つ問題点について」とのテーマをいただいで、少ない経験の私にとっては、昨年一年間を今あらためて思い起こし、頭の中で自分なりに整理をつけている次第です。

私たちには、教育実習生として公私立の幼稚園で勉強した短い期間と、教師として勤めるようになって約一年半の経験しかありません。きわめて少ない経験の中で、行事を、あるいは保育全体を誤った方向で見てしまっているのではないかといった不安もあります。

先輩の先生方にご指導していただいたり、時には学生時代の書物をひっぱり出したり、また同輩の者同士で集まって、なやみを話し、お互いに意見をのべあつたりしています。

その話し合いの中に、一番多くみられるのが、教師としての私たちをなやませる、教師の気になる幼児の問題と、園における行事の問題です。

### ◆各園さまざまな行事

一つの行事をとりあげてみても、その地域性、公私立の違い、各園の伝統などで、いろいろと相違があります。

幼稚園の行事が、その地域のひとつのお祭りのようにとりあげられているような農村地帯。だんだん、昔からの素朴な行事が変えられ、忙がしい生活に情緒的なものまでも奪われそうになっている都市の幼児たち。

創立の古い伝統的な幼稚園になればなるほど、行事は、こみいり派手に行なわれるような気がします。行事が、しっかりと根をおろして、その園の特色にまでなっているとさえ考えられるところもあります。

新しく勤めたばかりの教師は、その園の教育方針、特色などを早く理解し、自分のものにして、幼児教育にたずさわるのがよいでしょう。しかし勤めて間もない私たちには、幼児との毎日の

生活があります。その中で私たち自身が望む教育的なものも多分にあります。私たちの未熟なやり方で失敗や反省を重ねながらも、幼児とともに成長していく毎日の大切な保育があるのです。そして、そのカリキュラムに大きな部分を占めているのが行事ではないかと思われまます。

私は去年一年間、はじめての幼稚園教師としての経験に、行事については特に、指導していく立場よりも、むしろ先輩の先生方に導かれて、園児の一員になったつもりで行事をうけとめてきました。

さいわい、私の勤める幼稚園は、公立でもありますし、去年新設されたものですから、伝統といったものは、全くありません。ですから、私も負担をあまり感じることなく、自分のやり方で少しずつ行事にとりくめたことを、うれしく思っています。

行事のもつ本来の意味を全く改革するわけにはいきませんが、幼児にとって、行事を、できるだけ楽しい幼稚園での思い出にしてやりたいと思いました。

毎年くりかえされる行事、長い間伝統としてうけつがれてきた行事を、幼児は、日本人としても、社会でも、また家庭でもうけとるでしょう。しかし、その行事を、年間をとおして幼児の活動としてとりいれ、その時期の幼児の発達にみあった内容にしてとりあげていく、という方針を、先輩の先生方に話していただきま

した。

当園は地域としても、新興住宅地であることから、古くからの家風や、祖父母の昔話、伝統的な行事についても、あまりふれることなく、若い両親に育てられている幼児が多いようにみうけられます。ですから、幼稚園で行なう行事は、幼児の情操面を育てるのに役だつものでありたいのです。

このようにして一応の方針のもとに指導をうけながら、とりくんだ昨年の行事でしたが、行事の前の「うちあわせ」においても、十分に理解できなかったり、また誤まって解釈して、多くの失敗を残しました。

ここに二つの実践をあげてみました。私が、はじめて教師としてとりくんだ「子どもの日」と、一年間のしめくくりともいべき、「発表会」です。「子どもの日」は教師も、幼児もはじめてという中に、製作という、かなり高い要求を入園当初の幼児にしたことを反省しています。また「発表会」も卒業まじかな幼児とはいえ、ほとんど教師から一方的に与えてしまい、「見せる行事」にしてしまったような気がします。

そこでこれらをとりあげて、再び反省することによって、行事のもつ問題を考えていきたいと思います。

## ◆二つの実践から

### 子どもの日

四月下旬、幼稚園に入園して、ようやくなればじめたばかりの幼児たち。お友だちをみつけて、いっしょけんめいに遊ぶ幼児、まだひとりではんやりと人のすることをしている幼児、園庭でかけまわっている幼児、部屋で静かに絵本を見たり絵をかき幼児、教師の後からついてまわる幼児。

しかし四月も残りすくなくなると、緊張もようやくほぐれてきたようです。

職員室での話し合いの中心は、「子どもの日」のもち方についてです。新設園なので設備も整わず、五月人形、鯉のぼりはありません。どこの家でも、そろそろ鯉のぼりがたてられている頃でしょう。さわやかな五月の風とともに幼児は、「子どもの日」の近いことを感じているかもしれません。

開園はじめての行事でもありませんから、先生方の今までの経験をお話しあつて、この地域の幼児にあつた「子どもの日」にし、伝統的な面からもまた幼児を楽しませるということで、鯉のぼりを製作させることになりました。

白いプラスチックの棒六十センチぐらいの先に黄色い玉がつい

たサオを、とりそろえました。そこに、吹きながし、まごい、ひごいをつけます。吹きながしは、白画用紙八ツ切りを細く切つたのを台紙にして、そこへ色紙八ツ切りを同じく細く切つたのを、七色、順番にならべてはっていき、最後に丸くとじます。色の順番は、ひとりひとりの幼児が自由にすることも、はしから、きちんとはれるかどうか、相当話し合いました。そこはひとりひとりの幼児の活動をみて指導していくということで、かなり立派な吹きながしに、なりそうでした。まごい、ひごいは、色画用紙の黒と赤を一枚ずつ使って、たてに半分折つた大ききなので五十センチぐらいはあります。口のところは、糸はりがねをつけるので二重にし、しっぽはハサミで切り、うろこはバスで自由にかくことになりました。

団地なので本物の鯉のぼりが少なく、どうやらサオにつける順番も、はっきり知らない幼児が多いようです。そこで、まず幼児に鯉のぼりを認識させることに重点をおくことにしました。四月二十日頃から、準備を始め、二十五日すぎに、まず幼児に鯉のぼりのお話から始めました。

「みなさんは、お外で遊んでいる時、高いお空にヒラヒラしているきれいなもの、何か見たことありませんか」と問いかけてみました。すると「雲」、「鳥」全く予想外の答えがえってきました。驚いて、「キレイでできていてね。たくさん泳いでいる

ものよ」すると、次々に「コイノボリ」「こいのぼり——」と言いだしました。私は、ほっとして、そこから鯉のぼりの名前を、「カザグルマ」「ヒゴイ」「マゴイ」などと尋ねたりして、話を発展させていきました。

「幼稚園には鯉のぼりがないのよ。だから大きな鯉のぼりを、みんなで作ってみましょう。もし、じょうずにできたら、お部屋に飾って、それからみんなも、ひとりずつ作って、お家にもって帰って、お部屋に飾るといいわね」

自分で作って家へもって帰れるということが幼児の興味をめぐめさせたいのです。

みんなニコニコしていました。そして、「鯉のぼり」の歌をうたいました。

次の日から、およそ二日ぐらいの予定で、共同の鯉のぼりをつくりはじめることにしました。

いつも教師のまわりにくっついてゐる女の子三、四人を誘ってみました。おとなりの先生のなさっているのを見せてもらい、昨日準備しておいた色紙を手でちぎって、大きな模造紙の鯉にうろことしてつけさせました。

ハサミで切ったり、バステルでかくよりも、のりで平面的につけるのが一番抵抗なく製作にはいれると思ったからでした。入れかわり、たちかわり、十人ずつぐらいがつけ始め、混雑するほど

でした。

「あつこの辺が少しはれていないわね。こども、つけてちょうだい」などと言いながら、ようやく二日で、予定どおりでしたが、クラス用の鯉のぼりは完成しました。

さらに次の日「先生、きょうは何するの」と、鯉のぼりに必死になっている教師の顔色を見ぬいて同情してくれるかのように、幼児の方から問いかけてくれて、さっそく、五、六人の幼児から、各自の鯉のぼり製作が始まりました。

五、六人が十人、二十人と、いつのまにか全員が机にのり、ハサミ、バステルをもち出していました。グループで少しずつ指導していかうと考えていたのに、一斉的になってしまいました。

「先生、つくりたい」「どこにすわるの」とたずねる幼児に、「順番にしましょう」と、とめるわけにもいかず、次々とつくりはじめたら、どうしたらよいのかまごまごして、てんてこまいするばかりです。ほとんど全員で、あつというまに、つくってしまいました。まごい、ひごいで二日ほどかかりました。

吹きながしは、はじめての父兄参観日に一斉的に指導しようとして、未熟ながらも計画してみました。父兄の前で、緊張する私にあつちからもこつちからも、「先生、わからない」「先生、のりがない」「先生、紙が、どこかへいっちゃった」「これでいい、先生」と声がかかります。私は声をからしながら説明し、幼児の間を

あっちへ、こっちへ、オロオロしたのを今だにはずかしく、汗の出る思いです。

吹きながしを、はしからのりではれない幼児、バラバラとはずれてくる幼児もいました。鯉の目玉は、教師が切っておいた金と黒の色紙をはらせました。うろこはバステルを使って、白で自由に描きました。きれいなものをかいた幼児もいましたが、いくら教師が誘いかけても、なかなか腕を動かすもおっくうそうな幼児もいました。鯉のしっぽもどんとん切りすぎて、半分ぐらいの長さになってしまったのもありました。

鯉のぼりが完成して、家へもち帰った後、「はたして、この時期の幼児全員には、無理な製作ではなかったか」とか、「幼児は、本当に喜んでつくったのか」などと反省してみる余裕は私には全くありませんでした。無事、どうやら鯉のぼり製作を終えて、「ほっとした」というところでした。

うちあわせの時に話になかった鯉のぼりの目玉が、想像以上にクラスごとに違っていたり、指導上の細かいことは別にしても、もうすこし聞いておけばよかったです。反省する点が次々あらわれ、他のクラスの鯉のぼりが、立派に見えたものでした。鯉のぼりの目玉については、来年は、やはり家へもち帰るものは、そえる意味からも検討することになりました。

「子どもの日」のもち方については、鯉のぼり製作を活動として

とりあげたことは、幼児が「子どもの日」を楽しみに待つことからも、よかったのではないかということになりました。ただし来年は、製作期間に余裕をもたせて、ひとりひとりの幼児の発達にあわせて、少しでも無理のない指導にしようと思合いました。

## 発表会

三学期なれば、当幼稚園では、幼稚園生活のしめくりともいえるべく、父兄を幼稚園に招いて生活発表を行ないます。

いわゆる、「おゆうぎ会」「学芸会」です。一学期、二学期と、ともにすごしてきた幼児たちは、クラスのまとまりもよく、教師の要求に、かなりの程度までついてきてくれます。

今まで自分かたつな行動をしていた幼児も、集団行動ができるようになりました。クラス全体でのフォークダンスも、劇あそびも、まとまってよくできます。しかし発表会は、以前からも聞いていましたが、私が最も心配していた行事でした。「うちあわせ」では、発表会を、どうとりくむか、話していただきました。

特に劇あそびについては、劇あそびは、幼児の発達からみた一年間の総合的な活動のまとめとして、ふだんの保育の延長として発展させること。三学期でもあるので、初期の行事のように地域性を第一に考慮にいれず、園からの行事として園の方針のもとに行なうことになりました。しかし一年目の私にとっては、まだ十

分に幼児の姿をとらせることもできず、ふだんの保育の延長として無理のない活動にもっていくには、かなりむずかしいことでした。

頭の中に方針や教育的意義をいれていても、実際に幼児を目の前にすると、とまどいました。特にこまったのは「劇あそび」でした。「劇あそび」は、部屋で遊ぶときには、楽しくあれば、たとえ脱線しても、せりふや動作をうまくいえなくても、みんな教えてあげたりできますし、またうまくいかず笑ったりしても、幼児が喜んで活動できればよいはずです。

しかし「発表会」として父兄の前で演じさせるには、やはり、幼児ですから、失敗もほほえましく思えるでしょうが、教師として、ある種の緊張と心がまえが知らず知らずできてしまい、「さあどうしよう」ということになってしまふのです。

「劇あそび」——確かに、学生時代、本で見たことばであるし、講義もうけました。しかし、私の不勉強のためか、実際、いかにして劇あそびをやらせたらよいか、わかりませんでした。

こればかりは、本を読むだけで理解でき、指導できるといふものではありません。しかも、「発表会」での劇あそびは、「劇あそび」というよりも、五歳児においては、現実化の方向をたどり、ごっこから完全に「劇」に近い方向でなくては満足できなくなりつつあるのです。

私の劇あそびにおける経験は、ただ一度、ある幼稚園ですばらしい劇あそびを見学したにすぎません。それも完成したものをみただけですから、どのようにして導入されたのか、またどうすれば、あのように幼児のひとりひとりが生き生きと参加し、楽しいようすすめられるのかわかりません。

劇あそびにとりあげる内容は、幼児が平生からよく知っていて、好きなお話でなければなりません。そこで幼児にお話をした時、いちばん喜んで聞いてくれて、くりかえしお話をしてくれと言われた（入園当初、幼児の心をほぐす意味からも、また、「おむすびころりん」をとりあげました）

「おむすびころりん」をとりあげました。クラスの人数が四十名ちかくいるので、全員参加するのは無理です。各クラス、劇あそびは二つすることになりました。それも、ひとつの劇に約二十人余り参加させなければなりません。みんな、そろって楽しく参加させるためにも、原作にはない役までつくったり、サルや小鳥、リスと動物をふやしたり、ネズミの数を多くしたり苦労しました。

毎日連絡して練習しました。一日でもやめると、次の日、忘れてしまふと思ったからです。でもあとから考えると教師のあせりがあったためと思いますが、問題があるようです。ただくりかえしの練習は、かえって幼児の興味を失なうのではないか、一日の

練習量はできるだけすくなくと一日一回の練習にしました。ひとつの劇、約三十分。だんだんじょうずになってきて、二十分ぐらいにまでなりました。ほめてあげたり、しかったり。発表会が近づくとつれて、私はますますあせりはじめ、日に日に、こわい先生になっていくのを感じました。本当に愚かなことと、はずかしく思います。

幼児たちは、未熟な教師によくついてきてくれましたが、楽しいはずの行事が、苦しみになったのではないのでしょうか。行事のもつ、教師から与えるものという観念を、若い未熟さが、行事をますます悪い方向へ追いやり、それを一方的に幼児に与えてしまったのです。私は先輩の先生に、できるだけ近づこうと、差をせばめようと、いっしょうけんめいでした。

何のための発表会なのでしょうか。

先輩の先生方は、無理なく幼児を楽しませながら劇あそびらしく、伸び伸びとさせていらっしやいました。三つのクラスが一度に見せあった時ほど、自分のクラスのまずさを感じさせられたことはありません。しかし幼児を中心とした発表会のはずです。教師を満足させるための、父兄に見せるための発表会ではないでしょう。

私は教師としても誤った見方で発表会を見てしまったのでしょうか。——私だけではなかつたようです。父兄の中にも発表会という行事を誤って期待したようすがみられました。

配役を決める時でした。教師として、幼児の望む役をひとりひとりの幼児が、なるべく満足のいくようにしてやりたかつたのです。そこで、ある程度こちらからも、その幼児にやれるかどうかと考へたうえでしたが、クラス全体で誰が何をするとよいか、自分は何になりたいのか意見をのべあつて相談して決めました。ところがその日、欠席がちのA君が忘れられていて、後で残つた役を決めました。A君は、気の弱い男の子なので、不満があつても言えなかつたのでしょうか。テレながら、ふざけながらも、うれしそうに？ やつてくれました。

それは発表会が終わつたあとで、その父兄から直接相談されたことですが、本当に、驚くとともに、よい勉強になりました。

その時は、もうすっかり理解しておられ、親としてはずかしかつたと言つていましたが、A君は、母親がガツカリすると心配したらしいのです。発表会がすんで家へ帰ると、母親の顔を見るが早いか「お母さん、ごめんね」と言つたそうです。

そう言わたのは、子どもに誤つた期待をかけた微妙な親心と、さらに、そのような、気持を起こさせた「発表会」という行事の、古くからの観念に問題があるのです。

「お母さんの前で、じょうずに歌えた」「劇が立派にできた」ということで満足していた幼児もいました。

発表会后、今まで自分のすることに自信がもてなくて、どの活

動にも消極的だった幼児が、自信がついて積極的に明るくなりました。「センセイ」と小さな声でしか呼べなかつた幼児が、発表会後は、友だちと、大声で口げんかをしているようすを見て、本当にうれしく思いました。失敗反省をくりかえした行事でしたが、教育者としての喜び、生きがいをも感じました。

幼児にとって無理な発表会であつたかもしれませんが、教育的効果も認められました。地域的なためか、幼児は「発表会」で父兄の前で歌をうたったり合奏したりまた劇をすることを少しもはずかしがりませんでした。発表会後、先生方とこのようなことを話し合い、むしろ幼児たちは得意げにさえ見えたことから、来年の発表会は、期間と、その内容を検討しさえすれば、もつとすばらしいものになるのではないかと期待しました。

去年一年をふりかえって、新設園であるという、あわただしさの中で、新しく地域性を理解しつつ、それを生かしながら先生方と、つくりあげてきた行事だつたと思います。行事を望ましい、幼児の豊かな経験として考えるだけでなく、行事には、あくまでも、父兄とのつながりをとり去ることはできません。来年度は、今年以上に幼児の発達を考えた行事にしよう努力するとともに、父兄の啓蒙を、四月入園当初から一年間を通して徐々に行ない、本当の幼児の発達を理解してもらい、ただ表面にあらわれるものだけで幼児を判断しないようにするとともに、幼児の内面の

世界へも入っていきける教師になりたいと思います。

以上のべましたように、私の短い、しかも少ない実践ではありますが、行事は、幼児の楽しみであると同時に、かなりの負担となつて、幼児を苦しめているのではないかと言つても過言ではありません。

毎年くりかえされる行事を、何の不都合も感じないで、ただ受け伝えていくだけの、マンネリズム化した行事になってはいないでしょうか。去年も行なつた行事、そろそろ今年もその時期だから、去年の実践ノートを参考に行なうのではないのです。

もう一度、それぞれの行事を考え直してみるべきなのです。そして、反省し、改めるべきところは毎年でも正しいと思われるように改正されて、それが伝統としてその園にふさわしい行事として伝えられていくべきなのではないでしょうか。

先にも述べましたように、幼稚園における活動、中でも行事は父兄とのつながりが切りはなせません。父兄を満足させる、おみやげの、外面的行事になつていないでしょうか。幼児にとつて、幼稚園でのなつかしい思い出として、いつまでも心に残る行事にしていきたいと思つています。現在の幼稚園において、経験年数の多い先生方と、私たちの指導力の差が、一番はつきりと大きく現われるのが、この行事なのですから。

(四日市市立高花平幼稚園)